

毎月一回15日発行昭和50年1月15日発行・第61号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

2月号



坂本清馬

Libertaire VoL, VI, No 3

無政府主義誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和50年2月15日発行第62号

リベルテール

定価一〇〇円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1975年2月15日発行 VoL, VI, No 3
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替東京133830番三浦精一

目次	
巻頭言	1
国家―その覚え書(4)	2
アナキズムとオカルト	4
述懐	5
労働歌メモ	6
地方同志からの手紙	7
海外だより	8
野火	11
アナルコ・フェミニズム特集のお知らせ	15
編集室	16

坂本清馬さんの死

1975年2月巻頭言

坂本清馬さんが死んだ。一九七五年一月十五日の朝である。一九一一年(明治四十四年)一月十八日は大逆事件で幸徳とともに二十四名の死刑が宣告された日、翌十九日は天皇の聖恩を示すための恩赦で坂本さん等十二名は無期徒刑になった。一月二十四日に幸徳等十一名の大量絞首刑、二十五日に菅野スガは革命万才の叫びとともに刑死した。その思出の六十四年目を前にして坂本さんは、幸徳の生地高知県中村市で八十九歳の生涯を閉じた。坂本さんの生地は同じ高知県の室戸市である。

菅野スガは書き残している。「私共五、六人の為に、この不幸な巻添えにせられたのである。私達と交際して居ったためにこの驚くべき犠牲に供せられたのである。」

殺された十二人の大半と無期徒刑になった者の全部が無罪であった。

権力者のこの兇行は無政府主義思想がひろがることを恐れてのフレームアップで、全国的に無政府主義者幸徳に交流のある者を検挙して、フルスピードの暗黒裁判を強行したのであった。極刑を科して国民を威圧するとともに、天皇統治下における山形軍閥の独裁を意図したも

ので、第二次世界大戦に突入した前近代的な、民主主義という言葉にさえも恐怖する、独特な日本ファシズムへの道を開いたものであった。

一九二七年に処刑されたサツコとヴァンゼツチ事件は民主主義国家と称するアメリカの保守思想の高まりの中での無政府主義者の受難であった。思想は権力者の見えざる敵である。中でも権力を否定し、天皇制を否認し、権力国家体制を批判する無政府主義は、その存在そのものが権力者の呪詛の対象である。日本における司法権の独立も単なる名目に過ぎず、巨大な官僚制国家の一翼に過ぎない。官僚的奴隸制は洋の東西古今を通じて「不変なもの」の一つであり、この基盤の上に国家が成立している。坂本さんの無罪は分かっていても、無政府主義者坂本清馬をはじめ他の同志たちの無罪の立証は、手続きや過去の書類の検討、そして権力国家日本の威信にかけて不可能だろう。ヴァンゼツチの息子への手紙がアメリカで一般に読まれているように、坂本さんの生涯をかけての再審要求が庶民に知れわたることが坂本さんを庶民の中に生かすことにもなるだろう。

(三浦精一)

三浦 精一

玉川君の本の紹介を書くとき、あの大陸の一角で生活した日のことが、いろいろ思い出された。ここで、も一つの道草に、そのうすれた記憶をたどって見ることにする。

今も残念に思われるのは、六年もいたのにシナ語をおぼえなかったことだ。

親類の者の紹介で、青島の航業連合協会（後に華北航業総公会となる）に就職が決して彼の地に渡ったのは一九三九年十月だった。青島港は大港と小港とに分けられていて、大港は貿易港として大型船舶のつくところ、そして小港はジャンクや小形輪船（汽船のこと）のつく内国貿易港だった。その小港に分室があつて船舶検査や出入港許可を扱っていた。その分室の総務課で山口隆一氏の下に属していた。この山口さんは早稲田の高等学院を出て京都で浜田青陵学長の下で考古学をやった人で、私は大変にお世話になった。家族が来るまで毎日食事の世話になった。小港から毎日歩いている話しながらお宅まで行くのだった、歩きつつ見上げる十一月の空にはオリオンが輝いていた。オリオンはこのときから私の星

になった。今も空を見上げてはオリオンをさがす。山口さんと思う。オリオンよ見えてくれと語る。戦後も北京に兼松の駐在員として残っていた山口さんは、卑劣な中共のデッチ上げでスパイとして殺された。

この山口さんは英語、フランス語、北京語が達者だった。やるなら標準語としての北京語をやれといった。私も北京語をやる気になって夜学に行きはじめた。しかし出張すると中絶し、またやり直した。こんなことを繰返して遂に挫折した。

青島で話されるのは山東土語と言われる方言で、四声も発音も北京語から言えば乱れた言葉である。ある時、料理の出前の註文にアマ（女中）を清真回りの店に行かせたことがあった。アマは、あの店の者は北京語をしゃべるので全然わからないと、ふくれて帰って来た。若い娘をからかい半分北京語をつかったのだろう。清真回りの話というのはイスラム教徒で、起原的には異民族だったかも知れないが、漢民族の中のイスラムとも言われ、同じ宗教を奉ずる者同志の結束がかたく、多くの者は料理店をやり、シナ人よりも清潔だと言われ、肉も羊肉しか使わない。清真と言われるのはそのモスクが清真寺と言われるからで、料理店にも清真という表示がある。

山東土語は山東省を中心に、満州でもつかわれる。山

東省からの移民が多いからだ。土語として方言はたしかに局地的だが、これにその土地の民衆の言葉である。中国語と称する北京語が決して標準語ではない。それは中央官庁用語で、上海に行っても広東に行っても通じはしない。同じ漢字を使用するというだけで、南北の民族的異質性すら考えられる。征服被征服の結果としての文化的、民族的な融合が行われたので、文字を知らない民衆にとっては、土語しか正常な言葉はない。

×

山口さんはまた、何も知らずに青島に来た私に、日本はもう駄目だよと言った。日本の軍紀はすっかり乱れてしまっていて、嚴重な軍紀をもち、従来の兵士の概念とは違って、民衆を略奪せず、民衆を苦しめることもなく驚異の眼で見られている国民党軍（蒋介石直系）が、上陸した日本軍とは戦わずして退却し、その際、日本が来たら強盗、殺人、強姦をするぞと宣伝する。やって来た

日本軍はその宣伝通りのことをやるといっているのである。これが皇軍の姿だった。鶏泥棒に行つてそこに仕掛けられた爆弾で名誉の戦死をした兵士の話も何度か聞いた。敗戦のとき満州に入つて来たソヴィエト兵の略奪、強姦の話は皆聞いているだろう。こうしたことは軍隊や戦争の常識だろうが、他国に侵入して罪もない国民を略奪し、

強姦し、生命を奪うことを前提として常識化するのが国務教育でもある。

終戦直前に現地徴集で私は印墨にあつた桐部隊に入つた。部隊長は、この部隊はもつとも軍紀が嚴重だと話していた。おそまきながらも引きしめざるを得なかったのだ。食糧徴集の時も金を払っていたが、武器をもつた軍人に売る値段が公正でありうるだろうか。

入隊の時木炭エンジンのトラックで何度もエンコしながら運ばれたのだが、ガソリン車の軍用トラックも走っていた。数寄屋造りの贅沢な将校集会所の資材を運んでいたのだと後で聞いた。ガソリン一滴血の一滴というガソリンを使つてだ。軍隊では上官の命令は天皇の命令だった。こんな上官たちは今も恩給をタンマリ貰っている。そして自民党の大切な票田でもある。軍人という人殺し職業を志願して恩給までもらえるのだ。

(つづく)

■財団法人、日本協同体協会の事務所が移転しました。

栃木県今市市栄町二〇八三

TEL 〇二八八(二六)二二一九

*小人数用の宿泊・会合用の設備 あるそうです。

アナキズムとオカルト

菅 輝 生

まず初めに標題ありき。私の場合、最初に標題が決まらないと、何も書けぬ、という悪癖がある。さて《アナキズムとオカルト》などと、カッコイイ題をつけてはみたものの、私はふたつの関係について、実は何も知らないのである。

ただあつかましくいうならば、アナキズムはマルキシズムと比較してオカルトにかなり同情的だ、という予感が私にはするのだ。というよりも、マルキシズムがオカルトを否定するのに対し、アナキズムには自発的生命力の中にひそむオカルト能力を積極的に生かしていこう、という姿勢が見えるのである。

さてマルキシズムは科学あるいは社会科学の名においてオカルトを嘲笑する。たとえば、エンゲルスは『自然弁証法』の中の一章「心靈界での自然科学」で、オカルトを根拠のない《いかさま》である、と随所でののしり、「弁証法を軽視すれば罰なしにはすまされない」と書いている。たしかに、弁証法を軽視すれば罰なしにはすまされないかも知れぬ。がしかし、オカルトを軽視すれば罰なしにすまされない、ことも恐らく同様にいえるので

はないだろうか。

マルクス、エンゲルスに勝るとも劣らない弁証法大家バクーニンは、私の読んだかぎりでは、オカルトを大事にしている。私は以前バクーニンを読んだとき、たしかにアンダーラインをひいておいたのだけれども、今手もとに本がないのでその箇所を示すことができない。しかし、バクーニンはオカルトに深い同情と理解を表わしていたとおもう。

ところでマルキシズムとアナキズムのオカルトに対する関係は、昨年の某週刊誌と某テレビ局の論争に相似している。つまり某週刊誌はあたまたからオカルトを《いかさま》と捉えているのだ。あのケンカに関しては、私はどちらにも与する気持もないが、私は《オカルトを軽視すれば罰なしにはすまされない》という立場に立っている。ので、いくぶんかは某テレビ局の方に同情している。

ともあれ、オカルトを否定するという立場は、民衆の生みだした自発的な運動を無視する立場のことである。ニッポンの場合に限っていえば、明治維新後新興宗教が天皇制に反するといった理由で弾圧された事実と付合する。すなわち偉大なオカルト能力者であった教祖たちは、民衆の側の《現人神》であったために、天皇制における《現人神》からその存立を認められなかったのである。

オカルト能力者たちは、見えないものが見える。というよりも、民衆が何にაცოგაれ、何を見たがっているかがよくわかるのだ。がしかし国家は、民衆を《見ざる、言わざる、聞かざる》の状態にしておかなければならない。そのためには、民衆の願望について見聞し、発言して

しまう——コリン・ウィルソン流にいうならば——《X機能》を保有している人びとの存在を許しておくわけにはいかない。そして国家は人間の自発的生命力を疎外してしまうのだ。

国家を志向するマルキシズム、そしてその最も悪質な変型であるスターリニズムは、国家権力と同様に、自然的生命力を押えようとする。マルキシズムに見えないものが、アナキズムには見えてしまうからである。

(一九七五・二・三)

★述 懐 ☆☆☆

(II)

陣 内 剛

適正資格などあるのだろうか。

思想を生きたら一体何なのだ。

学生は労働者には大きな顔はできないのだけれど、労働者である事だけでは許されなくて、革命運動に身も心も

捧げている人が絶対に偉いのに違いない。それならば色の違いを除けば例の花売りキリスト娘も同様につくしているし、赤坊主連中は身をかけて殺し合っているのだから一層立派な事になってしまう。

私は趣味なのだと考えている。自分の日常では発揮できない能力や感覚を活用し、自らのために行為する趣味なのだと思う。もちろん趣味をやる人間は、不真面目にはなく真剣にそして気楽にやれるのだ。それが自分の好きな事なのだから。

その関わり方も釣り同好会のしくみと同じになる。同好会の中で問われるのは、その趣味についての知恵や技術であって、AさんとBさんの意見は全く同じ重さであり、重役も用務員さんもないのだ。

要は、もっと深く関わりたいと方向指示しながら関わる事、そしてその自分を自分で見ている事なのだ。

少なくとも一日五分間をその趣味にさく事が、地道なX運動といえるにちがいない。そうでないと、ノイローゼになるか開きなおるかの不毛さしなくなってしまう。